

# 道綽『安樂集』所説の実践論について

## ——五念門を中心に——

杉山裕俊

### はじめに

『安樂集』には曇鸞の著作が数多く引用されており、道綽がその教義思想に強い影響を受けたことは間違いないであろう。ところが、『往生論註』の支柱ともいえるべき難易二道や八番問答が引用される一方で、『安樂集』には曇鸞浄土教の主たる実践行であり、なおかつ浄影寺慧遠や道綽以後においても積極的に引用される「五念門」への言及は全くみられない。それどころか、『往生論註』に「修五念門」とある箇所を「修諸行門」と改変していることから、道綽は意図的に「五念門」という表現を避けているようにも思われる。このような『安樂集』と五念門の関係について、従来の研究では特に第三大門に示される『無量寿経』第十八願と『観経』下品下生の合釈文を根拠としつつ、道綽は時機相応の要行として称名念仏を徹底させるために五念門を採用しなかった、という一定の解釈がなされてきた。

しかしながら、『安樂集』全体を概観すると、確かに「五念門」という言葉の直接的な使用例は認められないが、五念門一々の内容に関する説示は随所に見出すことができる。したがって、道綽が自らの実践論を展開してゆくうえで、直ちに五念門を廃したとは言い難く、また称名念仏一行をもって『安樂集』の実践行とする見解にも些か疑問が残る。そこで本稿では、『安樂集』所説の実践論について、以下の二点を中心に論じてみたい。

- ① 『安樂集』に散見される五念門的要素を再整理し、道綽が五念門という実践体系をどのように捉えていたのかを検討する。
- ② 『安樂集』における念仏三昧と五念門の関係について考察する。

道綽『安樂集』所説の実践論について

### 一 『往生論註』における五念門解釈

#### (一) 礼拝門

曇鸞は『往生論註』巻下において、世親『往生論』所説の五念門に対する独自の註解を行っているが、まず礼拝門については、

云何禮拜、身業禮拜阿彌陀如來應正遍知

諸佛如來德有無量。德無量故、德號亦無量。若欲具談、紙筆不能載也。是以諸經、或舉十名、或騰三號。蓋存至宗而已。豈此盡耶。所言三號、即此如來應正遍知也。如來者、如法相解、如法相說、如諸佛安穩道來、此佛亦如是來更不去後有中故名如來。應者應供也。佛結使除盡、得一切智慧、應受一切天地衆生供養。故曰應也。正遍知者、知一切諸法、實不壞相、不增不減、云何不壞。心行處滅、言語道過。諸法如涅槃相不動、故名正遍知。無礙光義、如前偈中解。

爲生彼國意故

何故言此。菩薩之法、常以晝三時夜三時、禮十方一切諸佛。不必有願生意。今應常作願生意、故禮阿彌陀如來也。<sup>5)</sup>

と述べ、具体的な行相については言及していないものの、阿彌陀仏へ歸命し、その浄土へ往生したいと願う心(願生心)を発するために礼拝を行うとしている。

#### (二) 讚歎門

次に讚歎門については、

云何讚歎、口業讚歎

讚者讚揚也。歎者歌歎也。讚歎、非口不宣、故曰口業也。

稱彼如來名、如彼如來光明智相、如彼名義、欲如實修行相應故

稱彼如來名者、謂稱無礙光如來名也。(中略)然有稱名憶念、而無明由在、而不滿所願者、何者、由不如實修行、與名義不相應故也。云何爲不如實修行、與名義不相應。謂不知如來、是實相身、是爲物身<sup>7</sup>。

と述べ、讚歎門とは口業であり、無礙光如來(阿彌陀仏)の仏名を称えることであるとする。また単に口業として阿彌陀仏の名号を称えるだけではなく、実相身と爲物身を知ることが必要であることも指摘し、併せて

又有三種不相應。一者信心不淳。若存若亡故。二者信心不一。無決定故。三者信心不繼續。餘念間故。此三句展轉相成。以信心不淳故、無決定。無決定故、念不繼續。亦可念不繼續故、不得決定信。不得決定信故、心不淳。與此相違、名如實修行相應<sup>8</sup>。

とあるように、称名憶念する際には、信心を淳くし、信心を一とし、信心を相統する、という三種の信心が必要となることを明かしている。

### (三) 作願門

作願門については、

云何作願、心常作願。一心專念畢竟往生安樂國土、欲如實修行奢摩他故

譯奢摩他、曰止。止者止心一處不作惡也<sup>9</sup>。

と述べ、作願門の行相である奢摩他を「止」と訳し、心を一処にとどめて悪をなさないことと規定している。また「止」ということに三義があるとして、

奢摩他云止者、今有三義。

一者一心專念阿彌陀如來、願生彼土、此如來名號及彼國土名號、能止一切惡。

二者彼安樂土過三界道。若人亦生彼國、自然止身口意惡。

三者阿彌陀如來正覺住持力、自然止求聲聞辟支佛心。

此三種止。從如來如實功德生。是故言欲如實修行奢摩他故<sup>10</sup>。

と解説し、①ただ一心に阿彌陀仏を念じてその浄土に往生したいと願うならば、阿彌陀仏とその国土の名徳によつて一切の悪をとどめる、②阿彌陀仏の浄土は三界不摂であり、その浄土に往生したならば自然に三業(身口意)の悪をとどめる、③阿彌陀仏の住持する力により、自然に声聞や辟支仏を求める心が止む、との理由を挙げ、これらすべてが阿彌陀仏の功德によつて生ずるものとしている。

### (四) 觀察門

作願門と相關する觀察門については、

云何觀察、智慧觀察、正念觀彼、欲如實修行毘婆舍那故

譯毘婆舍那、曰觀。但汎言觀義、亦未滿。何以言之。如觀身無常・苦・空・無我・九相等、皆名爲觀。亦如上木名、不得椿栢也<sup>11</sup>。

と述べ、觀察門の行相である毘婆舍那を「觀」と訳し、身の無常・苦・空・無我・九相などを觀ずることと規定している。そして「觀」ということに二義があるとして、

毘婆舍那云觀者、亦有二義。

一者在此作想、觀彼三種莊嚴功德。此功德如實故、修行者亦得如實功德。如實功德者、決定得生彼土。

二者亦得生彼淨土、即見阿彌陀佛。未證淨心菩薩、畢竟得證平等法身。與淨心菩薩、與上地菩薩、畢竟同得寂滅平等。是故言欲如實修行毘婆舍那故<sup>12</sup>。

と解説し、①娑婆世界で浄土の三種の莊嚴相を觀じ、その功德をもつて修行する者は必ず浄土に往生することができる、②浄土に往生して阿彌陀仏をみれば、未證淨心の菩薩が瞬時に平等法身の菩薩となり寂滅平等を得るとしている。

### (五) 回向門

最後に回向門については、

云何回向、不捨一切苦惱衆生、心常作願迴向爲首、得成就大悲心故

迴向有二種相。一者往相、二者還相。往相者、以己功德、迴施一切衆生、作願共

往生彼阿彌陀如來安樂淨土。還相者、生彼土已、得奢摩他毘婆舍那方便力成就、

迴入生死稠林、教化一切衆生、共向佛道。若往若還、皆爲拔衆生渡生死海。是故

言迴向爲首得成就大悲心故<sup>13</sup>。

と述べ、回向には往相と還相の二種があるという。すなわち、①往相とは自らの功德を施し、衆生と共に弥陀浄土への往生を願うこと(往生以前に行う回向)であり、②還相とは往生以後に奢摩他・毘婆舍那の方便力を成就し、娑婆世界へ還つて、すべての衆生を教化して共に仏道へと向かうこと(往生以後に行う回向)であるが、両者とも娑婆世界から衆生を救済することを目的としている。

## 二 『安樂集』における五念門的要素

### (一) 礼拝

『安樂集』には「礼拝」に関して、

- ・ 見佛爲佛作禮。敬佛心重目不暫捨。<sup>①</sup>
- ・ 禮拜供養合掌觀佛。以因緣力故、復得值遇百萬阿僧祇佛。<sup>②</sup>
- ・ 以一禮佛故、得值無數諸佛。<sup>③</sup>

などの用例がみられるが、これらはいずれも断片的に使用された言葉であり、『往生論註』のような教義的説明は加えられていない。

しかしながら、道綽は『安樂集』第六大門において、十方淨土と西方極樂淨土の優劣を比較し、あらゆる淨土の中でも阿彌陀仏の西方極樂淨土が最も勝れていることを明かすとともに、以下のような問答を設けている。

【問】 曰、何故要須面向西坐禮念觀者。

【答】 曰、以閻浮提云日出處名生、沒處名死。藉於死地神明趣入、其相助便。是故法藏菩薩願成佛、在西悲接衆生。由坐觀禮念等面向佛者、是隨世禮儀。若是聖人、得飛報自在、不辨方所。但凡夫之人心相隨。若向餘方、西往必難。(中略)故『須彌四域經』云、天地初開之時、未有日月星辰。縱有天人來下、但用頂光照用。爾時人民多生苦惱。於是阿彌陀佛遣二菩薩。一名寶應聲、二名寶吉祥。即伏犧女媧是。此二菩薩共相籌議、向第七梵天上、取其七寶來至此界、造日月星辰二十八宿以照天下、定其四時春秋冬夏。時二菩薩共相謂言、所以日月星辰二十八宿西行者、一切諸天人民、盡共稽首阿彌陀佛。是以日月星辰皆悉傾心向彼。故西流也。<sup>④</sup>

この問答では「何故、西に向かつて坐禪・礼拝・念仏・觀察をするのか」という問いに対し、西とは「死」を意味する方角であり、それゆえに法藏菩薩は成仏して西方に淨土を建立し、死を迎えた衆生を救済するのであると答えている。そして、坐禪・礼拝・念仏・觀察などを実践する際、仏に向かうことは世の礼儀であるとしたうえで、凡夫は心と身体が相応した存在であり、余方を向けば西方極樂淨土への往生は不可能となることを主張している。さらに、このような向西の典拠として『須彌四域經』を引用し、西方を向くということは阿彌陀仏を稽首するためであるとする。つまり、『安樂集』における礼拝行とは、阿彌陀仏が淨土を構える西方に向かつて修すべきものであり、なおかつ、そこには阿彌陀仏への稽首、並びに願生の意が含まれていると考えられる。

道綽『安樂集』所説の実踐論について

### (二) 讚歎

『安樂集』の「讚歎」に関する用例を整理すると、

- ・ 諸經中偏歎西方阿彌陀國勸往生也。<sup>⑤</sup>
- ・ 是故讚歎彼國爲別異耳。若能依願修行、莫不獲益。<sup>⑥</sup>
- ・ 中國三藏法師并此土大德等、皆共詳審聖教歎歸淨土、今以勸依。<sup>⑦</sup>
- ・ 皆共詳審大乘歎歸淨土。<sup>⑧</sup>
- ・ 但阿彌陀佛、與觀音大勢至先發心時、從此界去。於此衆生偏是有緣、是故釋迦處處歎歸。<sup>⑨</sup>

・ 然二佛神力應亦齊等。但釋迦如來不申己能、故顯彼長、欲使一切衆生莫不齊歸。是故釋迦處處歎歸。須知此意也。<sup>⑩</sup>

・ 神力無極阿彌陀、十方無量佛所讚。<sup>⑪</sup>

とあり、いずれも「阿彌陀仏とその淨土を讚歎する」といった意味で用いられている。また仏名と讚歎の關係について、第五大門には

一依『大經』云、佛、告阿難、其有衆生、欲於今世見無量壽佛者、應發無上菩提之心、修行功德願生彼國。即得往生。

故『大經讚』云、若聞阿彌陀德號、歡喜讚仰心歸依、下至一念得大利。則爲具足功德寶。設滿大千世界火、亦應直過聞佛名。聞阿彌陀不復退。是故至心稽首禮。<sup>⑫</sup>

とある。ここでは往生淨土の経証として『無量壽經』と『讚阿彌陀仏偈』を引用し、阿彌陀仏の德号を聞いて歡喜・讚仰・歸依すれば、念仏によつて往生という大益を得ることができるとしているが、『往生論註』のように讚歎を口業(称名)とするような説示はみられない。

ただし、道綽が第二大門の中で以下の問答を設けている点には注目すべきであろう。

【問】 曰、若人但稱念彌陀名號、能除十方衆生無明黑闇得往生者、然有衆生稱名憶念、而無明猶在不滿所願者何意。

【答】 曰、由不如實修行。與名義不相應故也。所以者何。謂不知如來是實相身、是爲物身。復有三種不相應。一者信心不淳。若存若亡故。二者信心不一。謂無決定故。三者信心不相續。謂餘念間故、迭相收攝。若能相續則是一心。但能一心即是淳心。具此三心若不生者、無有是處。<sup>⑬</sup>

ここでは「もし阿彌陀仏の名号を称えただけで無明を除滅することができるというのであれば、どうして衆生が称名し憶念してもなお無明があり、未だに願いを満たす

ことができないのか」という問いに対して、それは阿弥陀仏の実相身と為物身を知らず、その名義が相応していないためであると答えている。さらに、信心について三種の不相応があることを指摘し、往生するためには信心を淳くし、信心を一とし、信心を相続する、という三種の信心を具足することが必要であると説くのである。要するに、この一段は先に挙げた『往生論註』の讚歎門に付属する内容を一つの問答として依用したものであり、曇鸞の五念門解釈が道綽の浄土教思想の形成に少なからず影響を与えたことを示している。

### (三) 作願

次に作願について、『安樂集』には「作願」という言葉の用例はなく、また『往生論註』のような「止悪（奢摩多）」としての行相も見受けられない。ただし、

- ・但以稱佛名力作往生意、願生彼土。<sup>(28)</sup>
  - ・以信佛因緣願生淨土、起心立德修諸行業、佛願力故即便往生。<sup>(29)</sup>
  - ・衆生亦爾。在此起心立行願生淨土。<sup>(30)</sup>
  - ・若能明信佛經願生淨土、隨壽長短一形即至位階不退。<sup>(31)</sup>
  - ・但知彼方有佛作往生意、亦得往生。<sup>(32)</sup>
  - ・若能作意迴願向西、上盡一形下至十念、無不皆往。<sup>(33)</sup>
  - ・若能信佛因緣願生淨土、所修行業並皆迴向、命欲終時、佛自來迎不于死王也。<sup>(34)</sup>
- など、『往生論』に説かれるような「願生」を意味する作願の用例はいくつか確認することができる。

### (四) 觀察

『安樂集』における「觀察」の用例を整理すると、

- ・諸佛如來有無量光明相好。一切衆生但能繫心觀察、無不獲益。<sup>(35)</sup>
- ・繫念具足思惟觀佛色身。<sup>(36)</sup>
- ・說觀佛相好及念佛三昧。<sup>(37)</sup>
- ・應當起立合掌正身、向西正念觀阿彌陀佛國、願見阿彌陀佛。<sup>(38)</sup>

とあるように、その多くは諸仏を含めた「仏の相好や色身を觀察する」という意味で用いられている。したがって、觀察行に關しても『往生論註』のような毘婆舍那（觀）としての行相を見出すことはできないが、曇鸞が提示した「觀」の二義のうち、①觀

察行による往生については、第一大門に

諸佛如來有身相光明無量妙好。若有衆生稱念觀察、若總相、若別相<sup>①</sup>、無間佛身現在過去、皆能除滅衆生四重五逆永背三途、隨意所樂常生淨土、乃至成佛<sup>②</sup>。

とある。ここでは諸佛如來の妙好を対象とした称念觀察による「滅罪」「往生」「成仏」が一連に説かれており、しかも波線部①「若總相、若別相」という表現には『往生論註』からの影響も看取される<sup>③</sup>。

また②觀察行によって浄土に往生した者が寂滅平等を得るということについては、第九大門の中で『往生論註』を直接引用し、

『浄土論』二云、十方人天、生彼國者、即與淨心菩薩無二。淨心菩薩即與上地菩薩畢竟同得寂滅忍。故更不退轉<sup>④</sup>。

と述べている。この一段は明らかに『往生論註』の觀察門を引用した箇所であり、道綽は得生者の具体的な様相として、阿弥陀仏の浄土に往生した者は淨心の菩薩と同じであり、最終的には上地（七地以上）の菩薩となつて等しく寂滅忍を得るから退転することがないとしている。

### (五) 回向

『安樂集』における「回向」の用例を整理すると、

- ・所修餘行迴向皆生。<sup>(42)</sup>
  - ・一切行業悉迴向彼、但能專至壽盡必生。得生彼國、即究竟清涼。<sup>(43)</sup>
  - ・一切行業但能迴向、無不往也。<sup>(44)</sup>
  - ・若能信佛因緣願生淨土、所修行業並皆迴向、命欲終時、佛自來迎不于死王也。<sup>(45)</sup>
- とあり、道綽は自らが実践したあらゆる仏道修行の功德を回向（往相回向）すれば、命終の後に必ず浄土へ往生することができると明かしている。

また第十大門では「釈回向義」という一節を設けて、

第二釋迴向義者、但以一切衆生既有佛性、人人皆有願成佛心。然依所修行業未滿一萬劫已來、猶未出火界、不免輪迴。是故聖者愍斯長苦、勸迴向西。爲成大益。然迴向之功、不越於六。何等爲六。一者將所修諸業迴向彌陀、既至彼國、還得六通濟運衆生<sup>⑤</sup>。此即不住道也。二迴因向果。三迴下向上。四迴遲向速。此即不住世間也。五迴施衆生悲念向善。六迴入去却分別之心。迴向之功只成斯六<sup>⑥</sup>。

と述べている。ここでは上記の往相回向に加えて、自らが修めた功德を阿弥陀仏へ回



向すれば、往生した後に六神通を獲得し、娑婆世界へと還つて衆生を救済する（波線部②）といった還相回向も説かれている。

上記のように、『安樂集』には「五念門」という言葉の用例はみられないが、礼拝・讃歎・作願・觀察・回向など、五念門一々に関する記述はある程度確認することができる。また「讃歎」や「觀察」の項でも指摘したように、道綽は『往生論註』の五念門解釈を度々依用していることから、五念門の構造そのものを強く否定しているわけではなく、むしろ個々の教義内容に関しては肯定的に扱っている。とはいえ、道綽が五念門という実践体系を採用していない以上、『安樂集』にも実践行の提示を求める必要がある、同時にそれは第四大門を中心に説かれる「念仏三昧」であると考えられる。

### 三 『安樂集』における念仏三昧

道綽は第三大門において、『往生論註』所説の難易二道を引用しつつ、往生浄土を目的とした独自の易行道を提示している<sup>(17)</sup>。さらに、『觀仏三昧海經』を典拠とした念仏三昧<sup>(18)</sup>を易行道の具体的な行法とし、この念仏三昧の実践によってあらゆる罪障が自然に除かれ、必ず往生を得ることができると説くのである<sup>(19)</sup>。

#### (一) 念仏三昧の経証

『安樂集』には念仏三昧の経証として数多くの大乗経論が引用されており、それらを経論ごとに分類すると左記のようになる。

##### 〔経論〕

##### 〔実践行〕

『觀仏三昧海經』

礼仏、称念觀察、首楞嚴三昧、觀仏三昧、念仏三昧

『無量寿經』

發菩提心、十念相統称我名字

『觀無量寿經』

十念、念仏

『華首經』

一相三昧、専念一仏

『文殊般若經』

一行三昧、繫心一仏専称名字念無休息

『涅槃經』

至心常修念仏三昧

『觀音授記經』

唯有一向専念阿弥陀仏

『般舟三昧經』

常念我名

『大智度論』

常念仏、行念仏三昧

『華嚴經』

菩提心中行念仏三昧、念仏三昧

『海龍王經』

八法（①常念諸仏、②供養如来、③咨嗟世尊、④作仏形像修諸功德、⑤廻願往生、⑥心不怯弱、⑦一心精進、⑧求仏正慧）

『宝雲經』

十行

『大樹緊那羅王經』

四種法、三十二器中六器

『月灯三昧經』

念仏相好及德行

『大乘起信論』

以專意念仏

『鼓音声陀羅尼經』

憶念、念仏三昧

『大法鼓經』

作往生意、常能繫意称念諸仏名号

『十方随願往生經』

念仏及転誦斎福

『大悲經』

専念仏相統不斷

『十往生經』

十往生法

このように、道綽は往生浄土の生因として、余行に対する念仏三昧の正当性・優位性を証明するためにこれだけの大乗経論を博引傍証し、末法における時機相応の往生行として念仏三昧を勧示するのである。同時に、これらの大乗経論が念仏三昧の典拠となる以上、道綽が提示する念仏三昧とは称名だけではなく、広義には礼仏（礼拝）・咨嗟（讃歎）・作往生意（作願）・觀察・廻願往生（回向）といった五念門的要素を含むものであると思われる。

#### (二) 念仏三昧の相状

道綽は念仏三昧の相状について、

行者亦爾。念阿彌陀佛時、亦如彼人念渡、念念相次無餘心想間雜。或念佛法身、或念佛神力、或念佛智慧、或念佛毫相、或念佛相好、或念佛本願。稱名亦爾。但能專至相續不斷、定生佛前。今勸後代學者。（中略）若始學者未能破相。但能依相專至、無不往生。不須疑也。

と述べている。ここでは願生者が阿弥陀仏を念ずる際には心に一切の余念がなく、ただ一心に念仏を相續して、仏の法身、神力、智慧、白毫相、相好、本願を念じ、称名もまた同様に修すべきであるとする。そして、二諦の道理を理解していない大乗始学の者は相を破すことができないため、仏の相好に想いを繋けて専らに念仏すれば必ず浄土へ往生することができると明かしている<sup>(20)</sup>。つまり、『安樂集』における念仏三昧とは、

一心に往生浄土を願ひ、諸大乘経論に説かれる礼拝・観察・称念といった実践行を修し続けることであると推察される。

### (三) 念仏三昧の利益

道綽は第四大門において、念仏三昧の利益に関する五つの問答を設けているが、各問答の内容を整理すると以下ようになる。

〔問答〕	〔典拠〕	〔利益〕
第一問答	『大智度論』	常念
第二問答	『惟無三昧経』、『譬喻経』	除障
第三問答	『十地経論』	延年益寿、現世利益
第四問答		念仏三昧即具一切四摂六度
第五問答		見仏

これら一連の問答から、道綽にとって念仏三昧とはあらゆる仏道修行を統攝した実践行であり、その利益は見仏や往生だけではなく、現世における除障や延命、さらには未来世での得証にまで及んでいることがわかる。だからこそ、道綽は第一大門の中で「此念佛三昧、即是一切三昧中王故也」と述べ、三昧の王である念仏三昧を時機相應の往生行として提示するのである。

以上、『安樂集』における念仏三昧とは諸大乘経論の経証にもとづく易行道の実践であり、願生者が阿弥陀仏に対して行う全身体的行為を包括したものである。道綽が五念門を採用しなかった背景には、このような念仏三昧によつて願生者が修すべき実践行を画一しようとする意図がみられ、道綽は五念門のように複数の行法を必要とする実践体系ではなく、あくまでも念仏三昧という最勝の一行のみを徹底して勸示することに実践論の主眼を置いたのではないだろうか。

## まとめ

本稿では「道綽『安樂集』所説の実践論について——五念門を中心に——」と題して、道綽が五念門という実践体系をどのように捉えていたかを明らかにすべく、第一に『往生論註』の五念門解釈を踏まえ、『安樂集』にも五念門的要素を見出すことができるかを検討した。第二に道綽が五念門を採用せず、諸大乘経論に広説される念仏

三昧を往生行としたことについて、念仏三昧の経証・相状・利益という三点からその背景を考察した。これまでの検討から、以下の三点を指摘することができる。

(一) 『安樂集』には「五念門」という言葉の用例はみられないが、五念門を形成する個々の行法に関してはその用例を確認することができる。また道綽は『往生論註』の五念門解釈をしばしば引用していることから、五念門そのものを強く否定しているわけではなく、一々の教義内容にはむしろ肯定的な態度を示している。

(二) 道綽は諸大乘経論に広説される念仏三昧を時機相應の往生行として提示するが、その内実は称名だけではなく、礼拝・讃歎・作願・観察・回向といった五念門的要素をすべて含み得るものであると思われる。

(三) 『安樂集』が五念門を採用しなかった背景には、念仏三昧一行にあらゆる実践行を統攝しようとする道綽の意図がうかがわれる。おそらく、道綽は五念門を五つの行門によつて成立する実践体系として捉えていたからこそ、あえて「諸行門」と呼称し、そのような諸行門に対する最勝の「一行門」として念仏三昧を強く勸示するのである。

今後は本稿での研究成果を踏まえ、『安樂集』における念仏三昧のさらなる検討（実践論）と、念仏三昧の対象となる阿弥陀仏（仏身論）、さらには念仏三昧によつて往生する浄土（仏土論）について考察を進めてゆきたい。

## 註

- (1) 『正蔵』四〇、八二七頁中。
- (2) 『正蔵』四七、一二頁上。
- (3) 『安樂集』と五念門に関しては、以下のような先行研究がある。
  - ① 山本仏骨「安樂集と五念門に就て」（『宗学院論輯』三三、一九七六年）
  - ② 宮井里佳「曇鸞から道綽へ——五念門と十念——」（『日本仏教学会年報』五七、一九九一年）
- (4) 『正蔵』四七、一三頁下。
- (5) 『正蔵』四〇、八三五頁上・中。
- (6) 曇鸞は『往生論註』巻上において「歸命盡十方無礙光如來者、歸命即是禮拜門」（『正蔵』四〇、八二七頁上）と述べ、礼拝が「歸命」に相当することを明かしている。
- (7) 『正蔵』四〇、八三五頁中。

- (37)『正蔵』四七、一七頁下。  
 (36)『正蔵』四七、六頁下。  
 (35)『正蔵』四七、四頁中。  
 (34)『正蔵』四七、二頁上。  
 (33)『正蔵』四七、一九頁上。  
 (32)『正蔵』四七、一七頁上。  
 (31)『正蔵』四七、一六頁下。  
 (30)『正蔵』四七、一二頁下。  
 (29)『正蔵』四七、一二頁中。  
 (28)『正蔵』四七、一頁下～一二頁上。  
 (27)『正蔵』四七、一二頁上～中。  
 (26)『正蔵』四七、一六頁下。  
 (25)『正蔵』四七、二〇頁中。  
 (24)『正蔵』四七、一九頁中。  
 (23)『正蔵』四七、一八頁上。  
 (22)『正蔵』四七、一四頁中。  
 (21)『正蔵』四七、一四頁中。  
 (20)『正蔵』四七、九頁下。  
 (19)『正蔵』四七、九頁下。  
 (18)『正蔵』四七、一八頁上～中。  
 (17)『正蔵』四七、一八頁上。  
 (16)『正蔵』四七、六頁下。  
 (15)『正蔵』四七、六頁下。  
 (14)『正蔵』四〇、八三六頁上。  
 (13)『正蔵』四〇、八三六頁上。  
 (12)『正蔵』四〇、八三六頁上。  
 (11)『正蔵』四〇、八三五頁下～八三六頁上。  
 (10)『正蔵』四〇、八三五頁下。  
 (9)『正蔵』四〇、八三五頁下。  
 (8)『正蔵』四〇、八三五頁中～下。

- (38)『正蔵』四七、二二頁下。  
 (39)『正蔵』四七、五頁中。  
 (40)『往生論註』には「但言憶念阿彌陀佛。若總相、若別相、隨所觀緣心無他想、十念相續名爲十念。但稱名號亦復如是」(『正蔵』四〇、八三四頁下)との一文がある。  
 (41)『正蔵』四七、一九頁下。  
 (42)『正蔵』四七、一五頁上。  
 (43)『正蔵』四七、一六頁下。  
 (44)『正蔵』四七、一八頁中。  
 (45)『正蔵』四七、二二頁上。  
 (46)『正蔵』四七、二〇頁下。  
 (47)拙稿「道綽『安樂集』所説の難易二道について」(『浄土学』四六、二〇〇九年)を参照。  
 (48)『正蔵』四七、一三頁下～一四頁上。  
 (49)なお、『安樂集』における「念仏」と「念仏三昧」、さらには「觀念三昧」との関係については、後日改めて検討することとし、ここでは藤丸智雄「『安樂集』における「三昧」の受容」(『武蔵野女子大学仏教文化研究所紀要』一七、二〇〇〇年)にもとづき、「念仏(広義の念仏)」と「念仏三昧(狭義の念仏)」を同義のものと捉えておく。  
 (50)『正蔵』四七、一一頁中。  
 (51)第一大門に「彼諸佛等亦以色身相好化度衆生、從是以後即得百千億念佛三昧門」(『正蔵』四七、六頁下)とある。  
 (52)道綽は第三大門において、『無量壽經』第十八願と『觀經』下品下生を合釈した独自の願文(『正蔵』四七、一三頁下)を提示し、称名念仏による往生を説いているが、第七大門で「若欲發心歸西者、單用少時禮觀念等、隨壽長短、臨命終時、光臺迎接迅至彼方、位階不退」(『正蔵』四七、一八頁下)と述べているように、称名はあくまで念仏三昧の一相状であると考えられる。  
 (53)『正蔵』四七、一五頁下～一六頁中。  
 (54)『正蔵』四七、五頁下。